

ウマクイク

美馬由美子



受賞のことは
評価してくださった審査員の先生方、ありがとうございます。
した。あの頃抱えていた、やるせない思いを文字にすること、少しは昇華できたように思います。私の困難との戦いは、新たなフェーズに入りました。乗り越えなければならぬ壁は、まだまだありますが、支えてくださる方々に感謝しつつ、誠実に謙虚に、そして何より楽しんで歩んでいこうと思っています。どんな経験も必ずついに力になると信じて。今回頂いた勲章は、父と母へのレクイエム。

プロフィール
エアグルーヴとステイゴールドに競馬の世界に引き込まれてから十年。今は彼らの孫・ひ孫たちを応援しつつ、馬が居る場所でホワ〜んと過ごすことで英気を養っています。昨年は、中央の競馬場全10場制覇を達成！

木々の葉をサラサラと揺らしながら、やわらかな風が流れ込む。

棚には、細長く削った竹を複雑に組み合わせた花籠や物入れ、幾何学的なオブジェ。一角には、様々な道具や書籍などが所狭しと並んでいる。

コウは、ここ別府の古民家に工房を構え、日々、竹工芸の作品を創っている。

コウと私は、高校の同級生。先日、同窓会で数十年ぶりに再会した。大阪の大学を卒業した後、東京の商社に就職したと聞いていたが、十年程で退社、三十歳を過ぎから竹工芸の専門学校に入学したとのこと。

一流大学、一流企業を経て、今は別府の山奥で天職を見つけたコウ。旅先でたまたま出会った竹工芸品に惹かれ、この道へ進んだ、と言った。定期的に個展も開いているとか。すっかりアーティストだ。

同窓会では、コウ以外にも大成している同級生が何人もいた。世界中を飛び回り、日本の外交を支えている同級生、保健衛生センターの所長として七十人の部下を抱えている同級生、老けた風貌故、『おとうさん』と呼ばれていた同級生は、今は裁判官をしていると言った。

高校を卒業して数十年。大成した同級生。あの頃は、私も無限の可能性を持ち、明るい将来を思い描いていたが、今は。みんなと差がついてしまった……。

複雑な思いにかられた。自分のこれまでの歩みを振り返る。胸を張れる歳月を過ぎてきただろうか。成長したのだろうか？ いや。目の前のことだけに対峙し、漠然と流されて生きてきた。

急に無言になってしまった私に、横にいたコウが、小さなキーホルダーを差し出した。

「作品名。ウマクイク」

ビー玉を顔に見立て、周りを細竹で編み、馬を模ったキーホルダー。ビー玉の中の白いイナズマ柄が、馬の流星のようだった。

「別府。気が向いたら、ぶらっと来て。コレのモデル、居るから」

「モデル？」

「来てくれたら紹介するよ」

同窓会での再会から二ヶ月後の初夏。コウの言葉を真に受けて、ぶらっと別府の工房に来てしまった。

突然にも関わらず、コウは歓待してくれた。
古民家を利用した工房。一歩足を踏み入れた瞬間、涼しい空気に包まれた。大きく開け放たれた窓から、やわらかな風が吹き込んでいる。

玄関の横には、昔、既だったと思われる場所が、そのままの形で残されていた。馬がお尻をこすりつけていたと思われる壁。少し表面が削れ、黒っぽくなっている。馬栓棒には、馬が齧ったと思われる形跡も。人間の住居と同じ屋根の下に馬の住居があるのは、馬を家族として大切にしていた文化だ。

工房内には、様々な形のオブジェ。竹の融合体である作品たちが放つ強いオーラに、圧倒される。作品作りの発想はどこから生み出されるのだろう。コウは『人と違う新しいもの』を作り出すことにこだわっている、と言った。さらに、心の中にわだかまりや迷い、不安など負の要素があつたら、作品に出てしまう。負の思いはリセットしないと良いものではない、とも言った。

わだかまり……。今回、急に思い立ち、別府に来たのには、訳があつた。わだかまりが、あつた。

現実に対するやるせなさ。近い未来への不安――。



私の鞆にぶら下がっている『ウマクイク』を見てコウが言った。

「そいつ、見に行く？」

工房裏の放牧地で、茶色い馬が一頭、草を食んでいた。さほど広くない放牧地だが、工房から一番遠い場所、こちらに尻を向けている。

「おい、チャー」「チャー」

コウが叫ぶ。

「あの子、チャーって名前？」

「そう。茶色いからチャー。単純すぎる」と笑った。

チャーは、呼びかけに全く反応しない。自分の世界に誰も入れない、と言っているように見えた。

「かわいくないんだよね。愛想が無い。人間が嫌いなのかな」

「競馬とかやってた馬？」

チャーは、この古民家のオーナーが知り合いから譲り受けたとのこと。十五歳くらいの騙馬ということしか、わからない。これまで、どこで何をしていたのか。人に懐かないから、虐待されていたのかもしれない、とも。

草をむしってチャーに振ってみるが、相変わらず、こちらに尻を向けたまま。

しばらくして

「中でお茶しよう」

私に申し訳なく思ったのか、そう言ってくれたが、私はその場に居たかった。

「じゃ、飽きたら中に」

と言い、コウは工房へ戻って行った。

放牧地の奥に、ポツンとチャー。牧柵の外に、ポツン

と私。かすかに、緑と土とボロの入り混じった匂いがしていた。

「チャー。君は今まで、どこでどんなことをしてきたの？たくさん苦労してきたのかな。君の苦労は、誰も知らない。君の気持ちは、誰にもわからない。でも君は何も訴えない。有名な競走馬や、オリンピックで喝采を浴びる競技馬と自身を比べたりしない。こうして淡々と生きている。チャーは頑張った時、褒めてもらえた？」

「……チャー、あのね、私ね」

心の中に散らばっていた言葉が、次々と溢れ出す。今年になって、突然、両親の介護が始まり、生活が一変したこと。やらなければならない膨大なことの数々。目の前のこと、先のこと。一人で奔走していること。

寝たきりとなった父の顔を見るとやるせない気持ちになること。認知症が進み、同じことばかり言う母には、ついキツイ口調になってしまふこと。その都度、母に対する申し訳ない気持ちと、自己嫌悪に苛まれること——。完全に独り言。愚痴。

私の現状を誰も知らない。父も母も、他の誰も。この先、どうなるのだろうか。近い将来やってくるであろう更なる困難。私に乗り越えられるのだろうか。どうしようもない不安に襲われる夜がある。時として心が折れそうになる。だから、今日、ここに逃げてきた。逃げるのは悪いことではない、と自分に言い訳して。

介護に直面している人、あるいは、それ以外の問題に対峙している人も、こんな気持ちを抱いているのだろうか。

私は、ねぎらって欲しいのだろうか？感謝の言葉が欲しいのだろうか？手助けして欲しいのだろうか？自分の

気持ちがわからない。ただ、今の状況を誰かに知って欲しい、とは思う。

「チャー、疲れちゃった」

相変わらず、こちらに尻を向けているチャー。私はチャーに背を向け、牧柵にもたれた。

空が青かった。

ここには、穏やかな時間が流れている。

ふいに、頭の上に、温かなものを感じた。振り返ると、真後ろに、チャーが来ていた。牧柵越しに、チャーが顔を寄せて来る。

「チャー」

チャーの鼻先にそっと触れてみた。やわらかくて、温かい。

チャーは、そのやわらかな鼻先で、私の鞆にぶら下がっている『ウマクイク』をチョンチョンと二回つつくと、大きく鼻息を吐いた。

「これ、チャーだよ。似てるね」

風が、チャーの鼻先を通り抜ける。

再びチャーに触れようと手を伸ばした。チャーは、その手を避けるような素振りをし、元いた場所に向かい、歩いて行った。

蹄が地を踏みしめるやさしい音が、ゆっくり遠ざかっていく。

考え過ぎるのはやめな、とチャーが言っている気がした。

鳥の囀りが、心に沁みる。

チャーの丸い尻に向かい、呟いた。

「そうだね。きつと、上手く、いく」